

小西甚一編訳「世阿弥能楽論集」を読む

- 「花鏡」から学ぼう -

1. 「離見の見」(りけんのけん)

舞に、目前心後(もくぜんしんご)と伝ふことあり。「目(め)を前に見て、心を後(うしろ)に置け」となり。これは以前申しつる、舞智風体(ぶちふうたい)の用心なり。見所(けんしょ)より見る所の風姿(ふうし)は、わが離見(りけん、注)なり。しかれば、我が眼(まなこ)の見る所は我見(がけん)なり。離見の見(りけんのけん)にはあらず。離見の見(りけんのけん)にて見る所はすなはち見所同心(けんしよどうしん)の見(けん)なり。その時は、我が姿を見得(けんとく)するなり。しかれども、目前左右までをば見れども、後姿(うしろすがた)をばいまだ知らぬか。後姿を覚えねば、姿の俗(しよく)なる所をわきまへず。

さるほどに、離見の見(りけんのけん)にて、見所同見(けんしよどうけん)となりて、不及目(ふぎゅうもく)の身所(しんしよ)まで見智(けんち)して、五体相応の幽姿(ゆうし)をなすべし。これすなはち、心を後(うしろ)に置くにてあらずや。かへすがへす、離見の見(りけんのけん)をよくよく見得(けんとく)して、眼(まなこ)、まなこを見ぬ所を覚(おぼ)えて、左右前後を分明(ぶんみょう)に案見(あんけん)せよ。さだめて花姿玉得(かしぎよとく)の幽舞に至(いた)らんこと、目前(もくぜん)の証見(しよけん)なるべし。

担板感(たんばんかん)に伝はく、「そうじて舞(まい)、働(はたら)きに至(いた)るまで、左右前後と納(おさ)むべし。」

<現代語訳>

舞に「目前心後」ということがある。「目を前につけ、心を後に置け」という意味である。これは前に述べた舞智の演じかたにおける心がけである。観客席から見る役者の演技は、客体化された自分の姿である。つまり、自分の意識する自分の姿は、我見であって、けっして離見で見た自分ではない。離見という態度で見るときには、観客の意識に同化して、自分の芸を見るわけであって、そのときはじめて自己の姿というものを完全に見きわめることができる。自分の姿を見きわめることができれば、前後左右、どこだって完全に見るわけである。けれども、自分の目で自分の姿を見れば、目前と左右とだけは見られるが、後姿はわからない。自分の後姿が感じとれなければ、たとえ姿に洗練を欠く点があっても、よくわからない。

だから、いつも離見の見をもって、観衆と同じ眼で自己の姿をながめ、肉眼では見えない所まで見きわめて、身体ぜんたいの調和した優美な姿を完成しなければならない。そして、これはすなわち、心を自己の後に置くという次第ではないか。どこまでも、離見の見ということをよく理解体得し、「眼は眼自身を見ることができない」筋あい(すぢあい)を腹に入れて、前後左右隈なく心眼で捉えるよう

にせよ。そうすれば、花や玉のように優美な芸の理想境に到達することは、はっきり立証されるであろう。

担板感に、「すべて、舞や動作に到るまで、左右前後と破綻のないようにせよ」とある。

注「離見」

我見すなわち主観的な認識を離れること。もと禅語である。演者が自分のいま演じている芸を観客の立場からながめるといふのだから、そのながめられている芸は客体化された自分だといえる。

P.198 ~ 199

2. 「知習道事」(習道を知る事)

至(いた)りたる上手の能をば、師によく習いては似(に)すべし。習(なら)はでは似すべからず。上手は、はや究(きわ)めて覚え終りて、さて安き位に至る風体(ふうてい)の見る人のため面白きを、ただ面白きとばかり心得て、初心これを似すれば、「似せたり」とは見ゆれども、面白き感なし。上手は、はや年来(ねんらい)心も身(み)も十分に習ひ至り過ぎて、さて、動七分(どうしちぶん)身を惜しみて、安(やす)くする所を、初心の人、習ひもせで似すれば、心も身も七分(しちぶん)なるなり。さるほどに詰まるなり。

しかれば、習ふ時には師はわが当時するやうには教へずして、初心なりし時のやうに、弟子(でし)を、身も心も十分に教(おし)ふるなり。教へすましてのち、次第々々に上手になる所にて、安(やす)き位になりて、身を少(すく)な少(すく)なと惜しめば、おのづから身七部動(しんしちぶどう)になるなり。

<現代語訳>

すぐれた名手の演じぶりは、自分の師についてよく学習した後に模倣すべきであって、しっかり学習しないうちに模倣してはならない。元来、名手といわれる人の能は、技術をきわめつくし、すっかり身につけて、その結果、安き位にまで至った芸で、観客にとっておもしろいのを、単におもしろいとばかり受け取って、初心の者が模倣すると「あの模倣だ」とはわかるが、感興は全然ない。上手は、すでに、年来、心も身体も十分に修練を積んで、その後、身体の動きを控えめに、七部ぐらいのところまで、余裕しゃくしゃくと演ずる。それを、初心の者が、修練をろくにせず、いきなり模倣すると、身も心も正味七分めの芸になってしまう。したがって、行きどまりになってしまう。

こんなわけだから、習練の時には師匠は、自分がいま演じているようには教えないで、むかし初心だった時のように、弟子を、身も心も十分に鍛えるのである。このように教えこんでだんだん弟子が上達してゆき、ついに安定した芸境までになったあかつき、はじめて動作を控えめに演じてゆけば、自然に、身七分動の芸ができるのである。

P.206 ~ 207